

特72
114

日本歴史画談

301656-001-7

特72-114

日本歴史画談

中村 徳助 / 編

M44.2

ACB-0001



265
647

472

114

日本歴史画談

267
647

東京野書店發行



特々
114

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我
カ臣民克シテ忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我
カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ
友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ
習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶
翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ
遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ
古今ニ通シテ謬ラス乙ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シ
テ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

明治
44. 2. 7
内交

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其福利ヲ共ニス 朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ 抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔克ニ恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ 朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク 朕力旨ヲ體セヨ

明治四十一年十月十三日

御名御璽



文學士 中村徳助 著

天照皇大神

今日我々有難は御世に生れて各々安らかに其の國におちついて職業をする様になつたのは遠いすつと御先祖の天照大神の御蔭です天照大神と申すと即ち天子様の御先祖で實に御威徳の盛んなことは天地を包む位ひの立派な御方です此の御方が初めて御孫の瓊々杵尊を此の日本國に御降しになつたとき『此の國は穀物よく實り人民は素直であるから汝行つて治めたがよいぞして代々同じ系統の君が臨んでよく此の民を可愛がつて遣れよ』と云はれたぞして叢雪劍八坂瓊曲玉八咫鏡と云ふ三種の神器を下されて『之は

二
汝の子孫が代々位を受け継ぐ時に譲り傳へてくれよ』と仰せられた世に之れを三種の神器と云ふ尊は大神の仰せを畏み謹んで御受けして『辱くも自分か此國を治める以上は國の隅々までもよく政治を行き通らせ人民を撫で慈み農業を勵んで益々立派な國に致しませう』と答へられたそこで天照大神は天兒耶根命手力雄命等諸々の神様を御伴にして天の浮橋に乗つて重なる雲をおし分けて瓊々杵尊の前に立たれて日向國高千穂峯に御降りになつた此の時第一に下界から御迎へに出られたのは猿田彦の尊であるといふこの高千穂の峯は今霧島山一に霧山と云つて東西の二峰に分れて居る一ツは日向國諸縣郡に跨つて一は大隅國噲唎郡に亘つて居る大きな山である扱て一度此に都されてから以來これを高千穂宮と云つて居たが追々尊の御威勢に敬服して來る人が多くなるに件れて野蠻な人達はだん／＼東方に追ひ退せけられて當分此に宮城を奠められた日向宮の御政事はこれであるそして天照大神から尊に賜はつた三種の神器は其の後崇神天皇の時に余り恐れ多いので此の模製を捧へて之れを天皇の御座所に安置して御下賜の御本體

の中劍は熱田神宮に鏡と瓊とは伊勢神宮に安置してある今日宮中の質所に飾つてあるのは崇神天皇以來の神器である。
この天照大神は實に神の中の神で此の神様の御蔭で今日吾々か有難い御代に悠々と世を送れるやのになつたのであると思へば吾々は寸時でも此神を敬ひ尊びて御奉公しなければならぬ。

●金鷄勳章の由來

天照大神から開けて來た此國の天皇の始めは神武天皇と申し上げる天皇は學問の才もあり武術の嗜みも深くて文武に秀でられた誠に立派な天子様であつた天皇が此國を治められた時はまだ諸所に野蠻な人民が居てやゝもすると朝廷の云ふ事を背かぬ者があつた此等不忠の人々を討ち懲らして國中を平穩にせられんと御盡力になつて昨日は東今日は西と御奔走なされたこと其の御心勞の程は今から申し上げるもまた御察しあける事も出來ない程である唯に人民の中に不忠な人がある計りではなく恐れ多いことでは



四
 むるが御一族の中にさへ天皇
 に向つて弓を曳かるゝ方があ
 った即ち長髓彦が乱暴を働か
 れた如きことである此の時は
 賊軍の勢が甚だ強いので天皇
 の軍が稍ともすると敗れさう
 であつたそこで天皇は一つの
 軍歌を作つて士氣を勵まされ
 た其歌は今日の歌よりは一寸
 風が變つて居るけれども誠に
 勇壯なもので之れを皆で一度
 に歌つてどつと進んだ時に賊
 軍の勢衰へて遂に敗れるやう
 になつた其の歌は「みつみま

しくめの子ら垣もとに粟生には葦一本そねかもとそねめつなぎてうちてし
 やまん」といふのである之れを今日の言葉で記して見ると「勇氣凛々と誠
 に壯なる吾が部下の兵士よ吾々家の垣の下の粟の園にはあの醜草のにはら
 か一本生へた早やく根のはこらぬうちに一度に根を断ち切つてしまをうよ」
 とこれは長髓彦を葦の草に例へて歌つたのである之れを歌つて勇ましく進
 軍したので賊軍は遂に敗れたと云ふ其の戦の真最中まだ勝敗が何れにある
 か分らぬ時に不思議なる事には大空が俄かに黒くなつて墨を流したやうに
 なつたとき何處ともなく一羽の鶴全身金色でびか／＼と光つて居るのが、ス
 ウット飛んで来て突然天皇の羽に止まつて四方をきら／＼と閃めかしたの
 で賊軍は目が眩はつて手向ふことが出来ずとう／＼天皇の軍に降参したと
 いふ話であるこの話から探つて明治二十三年に新に勳章の中に金鷄勳
 章を作つて將來戦争で特別の功勞ある人に賜はることになつたのである。

兄宮と弟宮との讓位

第十五代應神天皇の崩御あそばされたときに御位に即かるべき方に二人の皇子があつた其一人は菟道宮稚郎子と云ひ其一人は大鵜鴆尊と云ふ大鵜鴆尊は御兄であつて稚郎子は弟宮であつた此の二人の宮様は何れも伶俐な方であつたが天皇が崩御になる時に其の何れを確かと次帝になるべき方と御指圖がなかつたので端なくも即位の時に互に位を譲り合ふ事になつた弟宮は兄宮こそ當然次帝たるべき方にて在はずとて堅く拒んで位に即かれなかつた兄宮は先帝が前以て賢慮なる稚郎子を相續と定められたから余は帝位には即かぬと互に譲り合つて三年間は帝位が空しかつたその時に多くの人民に皆何方にても早く帝位に即かせられむことを望んで居た或時一人の海女が鮮魚を兔道宮に持つて行つて何ともつまらぬ物だが何卒御一覽下されたいと恐るゝ献上したら稚郎子は之れを退けられて「余は天子ではないかの浪速宮に在す兄宮の許に捧げ給へ」とて膠なく断られたそこで浪速



宮に行つて献上した所が同じく大鵜鴆尊は「余は天子ではない、菟道宮に行つて差上げよ」と云つて御取上げにならない、とうとう魚が途中で腐つてしまつたから更に新に釣して献上したが又た兩宮ともお断りになつて受取らない海女も根氣が盡きて籠を抱へて泣き悲しむだ人民も早く何方にても天子になつてほしいものだと望んでゐたか三年経つても音沙汰がないそこで菟道宮は自分が生きてゐる内は兄宮が即位せぬ即位せられぬ時は人民の

悲しみが見て居られぬとあつて、終に自殺をされた。そこで兄宮が初めて位に即かれた仁徳天皇と申し上げるのは此の天子様である。菟道宮の如きはよく弟の道を心得られた御方で、又善く民の心を汲まれた思ひやりの深い御方と乍恐申し上げてよい。兄宮は即位されてから都を浪速に移して舟路の便利を借りて遠く今の朝鮮と交際を結ばれた偉大な帝である。

太田道灌

徳川家三百年の礎を据えた江戸城今の宮城は有名なる太田道灌の築く所で、長祿年間今から四百年程前に出来上つたのである。家康は此に移つて此より日本國中の政令は一々發せられたのである。其の有名な城を築いた太田道灌と云ふ人は單に武藝一點の人ではなかつた。此の様な築城術に達した人で一面は風流な所もあつた武士と思はれる。此の道灌が或る日暇があつたので金澤に獵に行つての歸へり道夕立に出逢つた六浦と云ふ所を通つてから此處に濡れては歸られぬとて何處かで蓑を借りやうと一軒の破家に入つて行つて

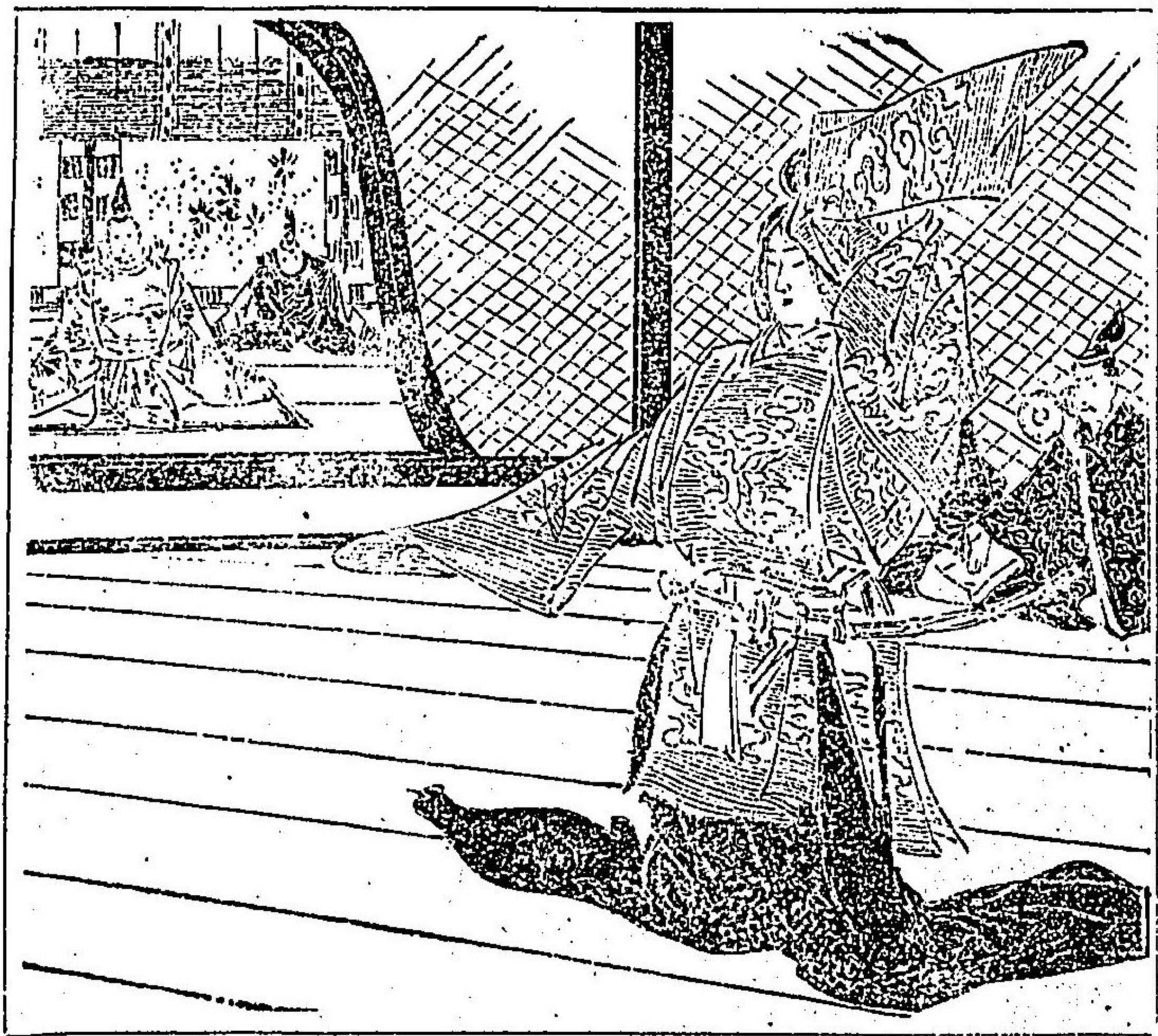
蓑笠はど
んな家に
もあるも
のと合點
して蓑を
貸して呉
れよと申
し込むと
家の中か
ら一人の
年若い女
が出て來
が、出て來
て蓑を持
つて來な



いで黙つて山吹の花を道灌の前に捧げ出した道灌は花などを望みはせぬ簀
 ちやくと腹立たし氣に云つたが女は唯笑つて居る計りだ道灌は腹立たし
 くなつて雨に濡れて歸つて來たが扱て此の女の仕打が判らぬので或時學者
 に聞いて見るとどうである夫れは下の古い歌から抹つて簀の用意のないの
 を知らせたのだと云ふ乃ち「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無
 さぞさびしき」とあつて山吹の花は七重八重に咲き亂れて實に美しいもの
 だが悲しい事には實が一つもないと云ふことで其の山吹の實とみのとをか
 けて云つたものであると判つたので道灌ははつたと膝を打つて「嗚呼吾れ
 ば愧ぢ入りたかゝる賤か家の少女にさへ學の力の及ばぬとは勉むべきは學
 の道なるよ」と云つて之れから大きに學問を勉強したと云ふ話である。

静御前

静は源義經の妾である義經は頼朝の實弟で平氏征討の時今から八百年程前
 兄に従つて諸所の戰場に手柄を顯はしたから終には猜疑深き頼朝に忌まれ



鎌倉に入る事を許されぬ次で
 は京都に人を遣はして之れを
 殺さうとしたので驚いて陸奥
 の藤原秀衡に據らんと山路は
 るく奥州さして下つて行つ
 た其の途中の吉野迄は静もと
 もに従つて行つたがそこで別
 れて静は獨りで都に歸つて居
 たのを頼朝が鎌倉に召よせて
 義經の行術を知せよと申して
 再三問ふたけれども吉野より
 先は何方へ参りしか存じませ
 ぬと計りで一向要領を得なか
 ったので暫く鎌倉に止めて置

いた元來静は舞の上手であつたので或日頼朝は静を召んで是非一段舞へよと云ふ静は心にもない事と何度も断つたがとう／＼拒みがたくして一段舞ひ出た頼朝は心の中で必ず祝ひ歌でも唱ふであらうと思つて居たら静はさも心配相な顔でこんな歌を唱つた、『しづやしづしづの緒田巻くり返へし昔を今になすよしもかな』また、『吉野山峯の白雪ふり分けて入りにし人の跡ぞ戀しき』と聲も沈んで唱つた歌の心は昔の世にくり返へしたいものだ吾が夫の俤のみ慕はるゝまた吉野山の雪深い所で分れた吾が夫は今何處に居らるゝだらう其の跡の戀しきよと云ふのであつたから頼朝は興さめた顔をして罪におとさうとしたが夫人政子のとりなしで咎だけは免されたと云ふこの静のやうな女は誠に氣風のゑらい人である權勢のある人に首を下げない所を今の婦人の鏡としてほしい。

上杉謙信と武田信玄

今から凡そ五百年程前のこと紀元二一三七年頃から此方は天下が大變亂れ

て英雄が諸國に起つて皆一度に天下を取らうとした其の内でも最も勢力のあつたのは關東の北條氏康と越後の上杉謙信甲斐の武田信玄とである武田氏は鎌倉幕府の頃から甲斐の守護職と云つて大名であつた晴信になつてから段々勢力が附いて有名になつて來た此の晴信が佛門に入つてから名を信玄と改めた元來沈着な人で戰の仕方が旨い人であつた又た領地の治め方もよかつたので人民が夫れ／＼附いて居た兵隊を信濃に出して先づ諏訪氏を亡ぼし次で村上義清を攻めたので義清は支へることが出來ずに終に越後に逃げて行つて上杉謙信に頼つた謙信は故と長尾輝虎と云つて代々上杉氏の執事であつた度胸の善い人で兵隊を使ふことの上手な人であつた且つ最も義侠の氣のある人である山内憲政の讓を受けてからはじめて上杉氏と稱し入道して今の名に改めた此の二人は何れも戰の道に勝れて居たから終始戦争ばかり十余年間もして居た謙信が攻めると信玄が防ぎ信玄が攻めると謙信が防いで年中戰の絶へ間はなかつた殊に謙信の感すべきのは戰争中敵の信玄に食鹽を贈つて敵に糧を與へたことである度胸がなくては出來ない事だ、



こんなに義侠な人だから、こんど村上義清が信玄の爲に攻められて謙信に頼
 つたので早速之を承諾し、快く信玄と大決戦をした天文十三年秋の中頃、信
 玄川中島に陣して謙信に供へた、謙信は正しく攻めては破り難しと思つてか
 一夜敵陣の備なきに乗じて一齊に襲撃した、遇一人の馬に乗つた大將が、金
 の道服を着て鹿毛の馬に乗り、白布で顔を包んで大刀を抜き、乍ら信玄何處に
 在りやと大聲を擧げ、乍ら飛んで來た、信玄遇陣營にあつたが、眼前迄切り込ん
 で來て刀を抜く隙もない、已に一命危かつたが、偶信玄の部下原大隅が槍を捻
 つて謙信を刺さうとしたが、當らず、馬を刺したので、馬は驚いて河の中に飛び
 込んだ、そこで信玄も漸く逃れることが出來た、實に際どい事であつた、これか
 有名な信玄謙信川中島の合戦である、此の時の模様を後に頼山陽と云ふ詩人
 が詩に歌つたのが乃ち『鞭聲肅々過夜河』 曉見千兵擁大河、遺恨十年磨一
 劍、流星光底逸長蛇』の詩である、これは何時かは彼敵信玄を殺してやらうと
 思つて永い間、劍を磨いて居たが、時なる哉、川中島で逢つたので一撃して息を
 止めんと思つたが、終に此度も逃がしてしまつた、誠に残念なことをしたとの

意味である。

◎名和長年

今から約六百年程も前の事後醍醐天皇は時の悪人北條高時の爲に隠岐に流され給ふたが、後高時が亡びると共に天皇を隠岐島から御迎へ申して第一に忠義を盡したのは伯耆の名和長年である。長年は南朝屈指の忠臣で世に美名を残した人であるが此人がまだ幼少の時に父母の許に養育せられて居る頃はその父はよく教訓の行届いた人で、嚴格慈愛な人であつた。或時長年が野原を歩いて居ると、牧牛の童が牛を曳いて来た。長年は小供心に其の牛に乗りたくて耐らないので、牧牛童に向つて『どうだ、已れを其の牛に載せて呉れないか、賃金は已れの家のアノ松の木を切つてやるぞ』と、郎の大きな松の木を指した。牧牛童は『乗つて行かつし』と承知したので、長年はいゝ氣になつて乗つて行たが、夫れから月日の経つのは早いもの、三年程経つてしまつた。或日の事、牧牛の童は長年の家に来て、先頃の牛賃として門の松の木を切つて給はれと



云ひ出した。長年の父は一旦は考へたが、自分の息子の約束したことをおれば、其の松を切つてやるも苦しかるまじと云つて、とうとう大きな松を切つて、牧牛の童にやつたと云、これは一旦人と約束したことは必ず實行せよと云ふ事を教へたものである。其の近所の人は此の話を聞いて名和が約束の松と云つて噂さしたといふ。

(圖聞ヲ鳴雷皇天明光後)



後光明天皇の御事

第一百十代の天子様で後光明天皇と申さるゝは、非常に伶俐な御方で、果斷に富み且つよく人間の弱点を直すことを心掛けられた御自分は、性來甚だ雷鳴が御嫌ひで、かの雲の中でおどろくしく鳴り出すと、天皇は耳を蔽ふて居られたが、これでは一國の帝王として誠に腑甲斐なしと思召し、熱心に雷を恐れぬ修業をなされた。それは、雷鳴のひどい時には、親しく大庭の中に御座を設けて、雷雨のやむまで天を睨めつめられて居つたので、どうとうこれを恐れないやうになられたといふことである。天子様の尊ひ御方でも、其の通りであるから、我々下々の人民は、自分の弱点を知らず厭くまでも、之れを匡正しなくてはならぬ。

楠公の遺訓

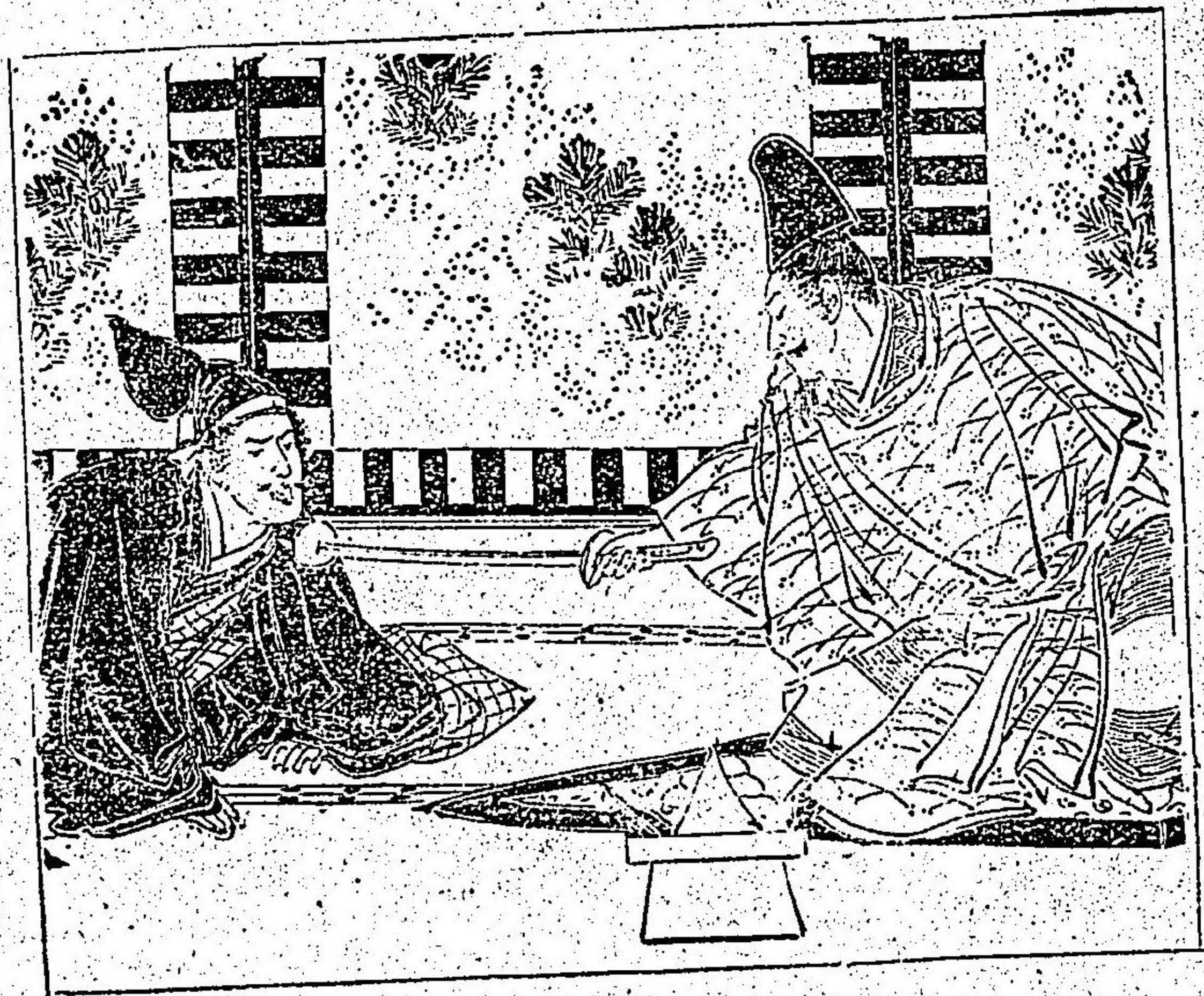
北條高時亡びて後醍醐天皇皇城に入り給ひ大權に由りて政治を行はれたが前に北條氏討滅の功を論ずる其方法に厚薄があつて其人に相當しなかつたので諸方に不平の徒黨が起つた野心ある足利高氏は之等の徒黨と一團となつて急に兵を擧げて皇居を圍んだので天皇は笠置に行幸せられるやうになつた一夜天皇夢占で河内の住人楠正成を召し出して高氏証討の任を授けられた正成は仰せ畏み進んで高氏と湊川に奮戦し死力を盡して縦横無盡に切り捲つたが何しろ敵は大勢味方は小勢で勝べくもなかつて隣れや打死したのである正成が陛下に別るゝ時に自分は此の一戦で死んでも七たび人間に生れて此の國賊を平げんと云つた其の忠烈は實に千古味曾有である此の正成が湊川に行く前に子息の正行を櫻井驛で教訓して云ふには「自分が此度討死したならば天下は高氏が奪つてしまふであらう此の時に命が惜しいとか家を立てるとかの爲に彼れに降参などしてはいけない竹は焼けても其の



節のまゝ残り玉は砕けてまた初めのまゝ眞白であるよく此の道理を辨へて一家の家來郎等と力を合はせて敵を平げて天子様に忠義を盡くせよ殊に自分の考で及ばぬ所は和田恩知八尾僧正等と相談せよ母に心肝をかけず學問に勉強せよとくれゝも訓戒したので正行はよく此の旨を心に入れて歸つて行つたが果して後年父正成の遺訓通り君の爲に四條畷に奮闘して父子共に芳名を後の世までも傳へた。

※ 荒木村重の大膽

織田信長(いま)今から二百三十年程前に駿河の今川義元を破つて徐ろに天下を掌握せんとの機会を窺つて居た信長は元來英雄的の大膽な人であるから部下には皆一騎當千の武士を集めた荒木村重は攝津の豪傑であつたが此人が信長に初めて面會した時に信長は其の容貌の立派なるのを見て其の膽力の何位か試めて見やうと突然大刀を抜いて其の先きに茶菓子に出した饅頭をつき串



して鼻先に出した大概な人は驚いてしまふのだが豪膽な村重は顔色も變へず平氣で靜かに佩して居た刀を置き、旬旬になつて進み出で顔を上げ口を開いて饅頭をみんな食つてしまつてからその刀を袖で拭いてにつこり笑つた。信長も此奴中々大膽な奴だ一方の大將としても宜いと笑ひ乍ら云ふには『攝津十三郡をお前の望むまゝに奪ひ取よ』とそこで村重は力戰して之れを攻め其の大半を得て自分の領地としたといふ。

◎ 近江聖人

徳川五代將軍綱吉の時今から二百七十年程前は天下治まり弓は袋に刀は鞘に收まる御代であつたから學問文藝の事が益盛になつた從て學者が諸國に出で來た先づ大名の内では備前の池田光政會津の保科正之民間では林道春秋生祖徠伊藤仁齋木下順庵新井白石室鳩巢山崎闇齋等である爰に云ふ近江聖人とは同じく中江藤樹先生の事である先生通稱は與右衛門近江國高島郡小川邑の人で善行をして人を教へ導いたので其の評判は大したものであ

つた先生が或日遠方に出掛け
て日が暮れてから歸つて来た
其の途中松並木にかゝると盗
賊の一組が突然出て来て道を
塞いで云ふには「金か命か置
いて行け」と脅かしたそこで
先生は錢二百文を興へたが盗
賊は中々承知しないで衣服も
刀も皆置いて行けといふ先生
暫く考へて云ふには「例ひ御
前と切合つて敗けても此の衣
服や刀は渡せない、サ一來い取
れるものなら取つて見よ、余は
近江の中江藤樹だぞ」と大喝



したすると盜賊共は驚ろいて慄へ上り、余等は知らぬ事とて無禮をしたり吾
が村にて先生の名を知らぬものは一人もない賊に失禮な事を申したとて一
向陣謝したので先生莞爾として云はるゝには「嗚呼汝等は元から悪人でも
あるまい人の道たる事を知らぬに由つてその様なことをするのか、扱てノ
哀れな人間である」と云ひ乍ら錢を興へて歸られた、それから後其の盜賊は
心を改めて正しい職業についたと云ふ。

✧ 黄海々戦、坂本少佐の奮闘

明治廿七年に朝鮮に東學黨といふ暴徒が起つた時に其の勢盛んで國內が動
亂し出して来た、そこで清國は屬國の難を救ふと稱して兵を牙山に送つたか
ら吾國も亦た出兵して此にははしなくも、日清兵の衝突となつた、そこで八月に
は天皇陛下は宣戰の詔勅を下されて愈々開戰となつた吾軍は成歡牙山の諸
戰で清軍を破り海には豊島で敵艦を虜にして進んで黄海の海戦となつた、此
時赤城艦は其速力稍遅く他の艦隊と共に運轉することが出来ない敵の巨艦



二十六
 は之れを目がけて撃ち沈めやうとして突進して来た赤城はこれに對して頻りに砲撃したから敵艦來遠は沈んだ此の時艦長坂本八郎太は一步も後へは引かず死ぬ覚悟で敵艦に海まり艦首を衝突して共に碎けんと自分は橋頭に上つて號令し正に敵艦を衝かうとする刹那敵の砲丸は赤城の橋頭に命中して其の破片の爲に坂本艦長の身体は粉微塵になつて海に飛んでしまつた坂本少佐の様な人は僅かに六百廿二噸の

小艦で之れに十倍する清國の大甲鐵艦定遠鎮遠等を相手として奮闘血戦して彼を惱ましたのは誠に古今に希れなる名將として賞讃してよい。

旅順の戦

旅順は一の海峡を挟みて威海衛と相對し支那渤海の入口で要害の土地であるから敵國では茲に堅固なる砲臺を築いて、そして嚴重に守つて居た其の砲臺には二種ある一は陸方面砲臺で背面の防禦に備へ一は海岸砲臺で正面の防禦に備へて居る明治廿七年戦役の時に我大山大將が第二軍を卒ゐて旅順に進むと其の期する所は先づ陸砲臺を攻撃するのに在る而して其方面の砲臺中最も高大なものは椅子山砲臺で之れを陥す時は他の砲臺は悉く之れから見下ろすことが出来る故に吾軍はまづ之れを占領するのを第一の目的としたのである。

斯くて吾軍は部署をさめて十一月廿一日の夜明け方攻撃にかゝつた第一師團長山路中將は椅子山に向ひ同砲臺を圍んで射撃した敵も必死となつて應

戦し松樹山砲臺も盛んに發砲して之れに應戦した其聲轟々般々天地も震動するばかりであつた此時戦ひ最も烈しく忽ち内に椅子山が占領せられさうになつた此時西少將の部下の丸井第三聯隊第一大隊長は一聲鋭く叫んで砲臺内に突進し縦横に奮闘して敵を切り捲くつた吾が軍は勝に乗つて松樹山の砲臺に向つた敵兵椅子山の陥ちたのに膽を潰し吾が軍に當るの氣力なく砲撃數發すると忽ち逃走し同砲臺も亦



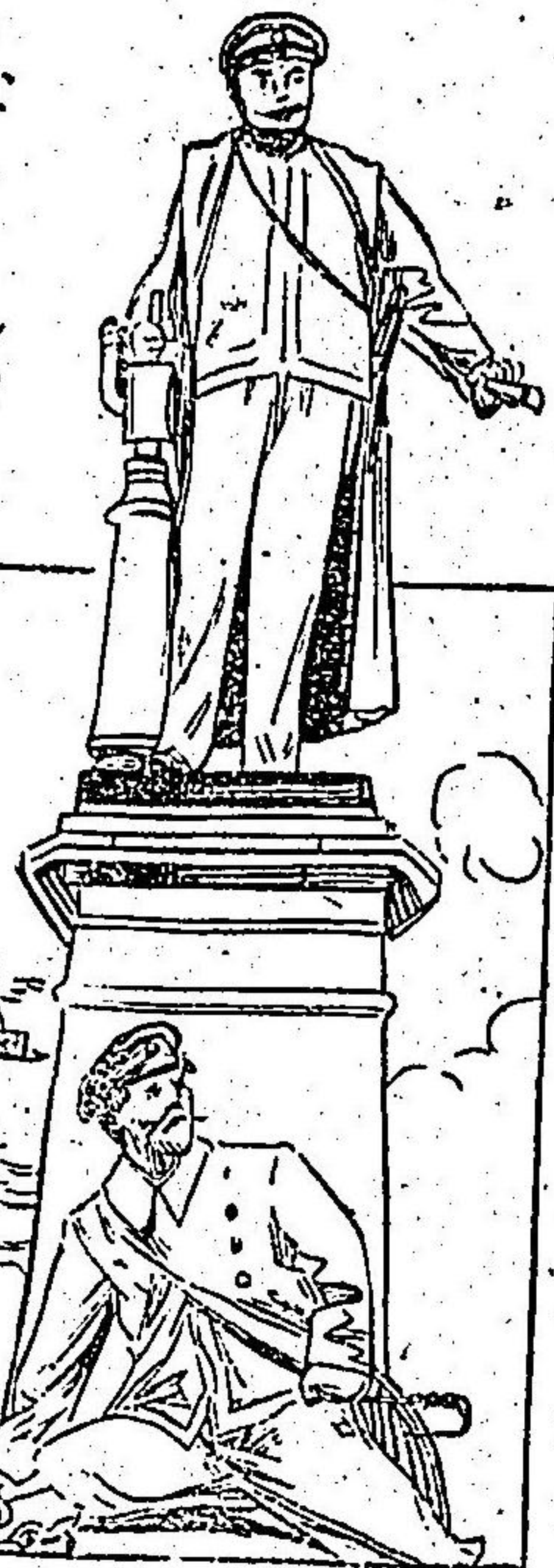
た難なく吾手に入つた次で混成旅團長長谷川少將の部下吉田聯隊長は兵を率ひて雨霰の如くに飛び来る彈丸を物ともせず二龍山砲臺を占領した此の時地雷火眼前に爆發して其の凄いと繪にも書けぬ様であつたこの他の小砲臺も吾が軍の勇敢な攻撃に耐えず忽ちの中に陥落したので更に海岸砲臺の攻撃に着手した此の砲臺の中で尤も要害なのは黄金山砲臺である山地中將は歩兵第二聯隊を擧げて此の攻撃の任に當らせれた第二聯隊は進んで旅順の市に潜伏した敵兵を屠り其の黄金山から打下るす敵丸を胃し嶮岨や絶壁を駆け上つて呐喊して砲臺内に突進して之れを占領した翌廿二日他の海岸諸砲臺は戦はないで吾が手に入つたかくて旅順半島二十余の砲臺兵營船渠軍器や諸器械等は全く吾が軍の所有となつた此の一戦争で我兵の死んだものは四千余人負傷二百余人そして敵の死者は三千余人負傷者は無數だといふ午后四時になつて吾軍は全部旅順に入つて君が代を一聲に奏してめでたく占領した

日本海海戦

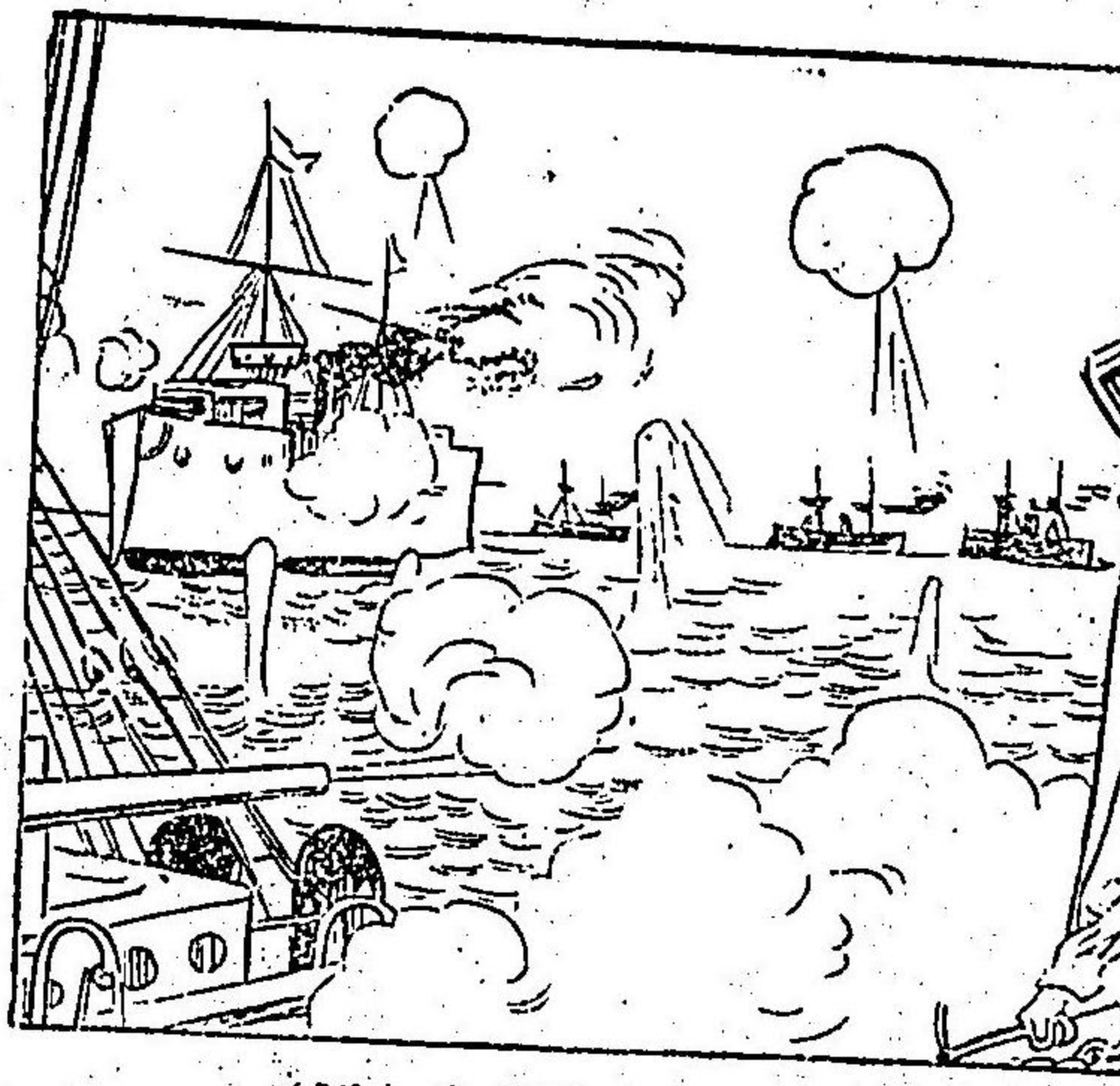
明治四十二年五月二十七八の二日に亘つて吾が海軍は露國のバルチック艦隊と日本海で出逢つて大戦争をしたをして其の結果は敵の艦隊全部を殆んど全滅させた吾日本が開けてから以來こんな大戦争をしたのは無いと云つてよい扱て此日の戦争の模様はどうであつたか。

初め露國の艦隊が南洋の方に一寸姿を見せたので吾が艦隊は之れを日本の近海まで呼び寄せて一度に打ち沈めてしまふ計畫を立てたのだから日本艦隊は朝鮮の鎮海灣に根城を構へて容易に動かない静かに敵の様子を伺つて居たとはいならず敵艦は一時安南沿岸に碇泊して居たが漸次に吾近海に表はれて来たそこで東郷大將の指揮する艦隊は見張の船をずつと南方に派遣して置いて本隊は徐ろに時機の来るのを待つた果して二十七日の午前五時頃に見張船の和泉と信濃丸の二艘から無線電信で敵艦見ゆと信號して来た吾艦隊の勇士の面々はいでや吾腕を試むべき時が来たと皆小躍して喜んだ午後

二時頃になると吾艦隊は沖の島で敵艦を迎へ撃たうと計畫した敵艦は豫定の通りポロチノ型戦艦四艘を先頭にしてオスラビヤ、シンイタリー、ナワリン、ナイモフなど云ふ善い艦隊を撰んで威勢よく黒烟を吐き乍ら進んで来た此の他にニコライ一世、オレーグ、オーロラ以下の二三等巡洋艦の一隊が此の後に續き其の他ドミトリ、ドンスコイ、ウラジミルモノフ等云ふ通報艦や病院船が此れに繼いで其の隊列數裡に亘つて居たそこで東郷大將は吾が全艦隊に對して「皇



(圖) 倭銅佐中瀬廣 = 並戰海大海本日



國の興廢は此の一舉にあり、各員一層奮勵努力せよ」とて、全員の勇戦を望んだ。さなきだに、肉躍り骨鳴る、吾勇士の面々かの戦艦を悉く生擒して、吾日章旗を立てるは、東の間ぞ見よやと計りに、勇氣日頃に百倍した午後二時過に、彼れより發砲したから、吾れは之れに應戦して、敵の陣列の亂れるのを待つたが、吾れ砲彈は一發又一發、善く命中したから、オスラビヤの如きは、忽ちの内に撃沈せられ、スワロフや、歴山二世號に、火災が起り、敵は頗る動亂した、其の硝烟は、西風に靡いて、烟燭天をも焦がさん計りであつた、斯の如く、彼我入亂れて、暫くは大戦鬪に、凄じい光景であつたが、午後五時半頃になると、敵艦は順次に沈められたり、火災を起したりして、命から、皆南方に向つて遁走し出した、此時日が早や暮れかゝつたので、逃ぐる敵を追ふのも無益と、終に全艦隊に引器を命じた、此の戦で、敵艦の沈められたものは、二十艘捕獲したのが、五艘逃走後、破損又は沈没したのが、二艘降伏したのが、六艘であるとは、如何に立派な勝利であるまいか、露國が全力を賭けて、吾れに向つた仕事も、終に一抹の水の泡となつてしまつた。

◎朝鮮の合併

日本と朝鮮との關係は、ずっと昔から續いて居るので、早く崇神天皇の時には、任那の人が、敦賀の國から上陸した事があり、また神功皇后の時には、新羅は日本、野蠻人熊襲の援兵をしたので、遠く海を渡つて、此國を討た、所謂三韓此時朝鮮は、馬韓、辯韓、辰韓の三國に分れて居た、征伐とは、此の事である、後ち又た足利將軍義持の頃になると、使を遣はして、吾れに交際を求めた、其後豊臣秀吉が、朝鮮に對して、依然吾國に貢を入れよと云つても、答へないので、此に太閤の朝鮮征伐が起つた、清正が朝鮮の成鏡道で、二人の皇子を生擒にしたのも、此の時であつた、惜しい事には、此の時秀吉が病死したので、征伐が中途で止めになつた、徳川政府になると、相變らず通商はして居たが、熱心ではなかつた、こんだ明治の政府になると、度々日韓の使が往來して、交際や、親密になつたものゝ元來、強いものに附きたがる根性なので、當時は、重に清國に追従して、吾日本を馬鹿にして居た、そこで、明治二十七八年の戦争の時、は一方清國を壓倒して、日本

の威勢を朝鮮人に見せたものだから之れからやゝ吾日本を恐れ敬ふやうになつて來たけれどもまだ内心は馬鹿にする氣があつたのである。偶ま三十七八年の戦争になると又々日本は歐羅巴の大國露西亞に對つて閉口させたので朝鮮人は驚いてしまつて愈日本に依頼して國を治めて貰ふ様な氣になつた。そこで日本政府は韓國を保護國として其の政治を執行させる爲に新に伊藤博文公を韓國統監に任じて専ら朝鮮に居て其政治を行はせ、會爾荒助子を副統監として實地に此國の政治文



(圖の邦合韓日)

日本歴史畫譚終

明を開發に掛つたが偶たま四十二年の十月二十六日に伊藤公が韓人の浮浪人安重根の爲に哈爾濱で暗殺されたので時の統監會禰子は此の機を利用して愈々韓國を吾國の領屬たらしめやうと計畫を立てたのであつたが子は病の爲に任を辭して新に時の陸軍大臣寺内正毅子が代つて統監となると時機漸く熟したので終に日韓合邦を發表した吾が天皇陛下は八月十九日に日韓合邦に就て有難い詔勅を下し賜はり韓國を改めて朝鮮と云ひ國王は日本の皇族となり彼の功臣名門は夫れゞ金員勳章を下さつて新附の民を優遇せられる。又た從來の統監府は改めて朝鮮總督府と云ひ寺内子總督となり山縣伊三郎子副總督となつて實地に永久に朝鮮半島は吾國の領地となつた。二千年來半附半背の韓半島は長へに日本帝國の一州となつたのである。吾が國民は永遠に此半島を日本の物として益開發してやらねばならぬ。

明治四十四年二月一日印刷
明治四十四年二月四日發行

定價金 八錢

編輯者 文學士 中村 德助

發行者 東京市日本橋區通油町十八番地 水野 慶次郎

印刷者 東京市神田區三河町四丁目三番地 清水 喜一郎

不許複製

發賣所

東京市日本橋區通油町
振替口座東京三三四三番

水野書店